

19. こういうわけで、

あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、
今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

20. あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

21. この方にあつて、

組み合わされた建物の全体が成長し、
主にある聖なる宮となるのであり、

22. このキリストにあつて、

あなたがたもともに建てられ、
御霊によって神の御住まいとなるのです。

説教

先週は、「神の家族」ということで同じテキストからお話ししましたが、ちょっと重要なポイントが、特に20節以降が話し足りなかったもので、今日は、さらに補足して、家庭とは何であるのか、その前提として教会とは何であるのか、その教会を理想として、家庭とは本来どういうものであり、何を目標とするのか、今日のみことばからそれをお話しします。

普通、私たちは、教会と家庭とが一体何の関わりがあるかと思います。しかし、これまでお話ししてきたように、実は、大あり、なんです。教会は「神の家族」だ、と使徒パウロは言います。教会は、究極の「家族」なんです。これ以上ない「家族」、天上の「家族」、「神の家族」だと言うのです。これは実に画期的なこと。教会が、実は真の家族であるなどということは、考えたことがあるでしょうか？しかし、聖書によれば、教会こそ真の家庭であり、家庭を理解する上での鍵となるものです。

ですから、私たちが、家庭とは何であるかその本質と目的を理解する上で最も重要なことは、教会の本質と目的を理解することです。使徒パウロが、教会は「神の家族」と、両者を重ね合わせて紹介しているように、教会がいかなるものであるかを正しく理解することが、家庭というものを正しく理解する唯一の道です。

そこで、今日のみことばから、パウロが考える「教会」とはなんであるのか、そして、そこから、同じくパウロが考える「家庭」とは何であるのか、共に学びましょう。神さまは、最初の人間アダムを創造なさる時、アダム一人を造るにとどまらず、「人がひとりであるのは良くない」（創世記 2:18）と、助け手としてエバをも造り、そうして家庭を創造なさいました。その最初の家庭は、神さまに祝福されて（1:28）、この上なく最高にすばらしく良い家庭でした。「見よ。それは非常に良かった。」（1:31）そして、生き生きと生命力にみなぎり、生み、増え、地に満ちて、自分たちのみならず、生きとし生けるすべてのものを支配せんとする勢いに満ち満ちていました（1:28）。

しかし、人が、神さまのみことばに背いて生き始めた時から、夫婦の関係は神さまに呪われ、男も女もすべて空しく死ぬために空しく汗水流して必死に労苦して、そうして最後は死んでしまうという、まことにこの上なく空しい家庭生活へと落ちぶれ果ててしまいます。かくして、最初の家庭の墮落以来、正しい家庭はひとつもなくなります。そして、そのままでは神さまの祝福を受けるに足る

家庭など、この世にひとつも存在しなくなってしまったのです。このような完全に罪に墮落した家庭ばかりが満ちている、人間の世界のただ中に、キリスト教会が誕生しました。それは、使徒パウロが「神の家族」と呼ぶもので、崩壊した家庭とは全く別次元にして完全に別物の、新しい家庭です。それは、人類の墮落以前の、本来の人間家庭の姿をあらわすものです。否、それ以上に、一度墮落した、人間の、どうしようもない家庭を、御子キリストの血によってその罪を贖い、神の子としての身分と特権を与えて、全世界の祝福の基となすべく新しく再び造りかえた、神さまの再創造の作品です。世界再創造の先駆けです。罪に墮落し呪われた世界を新しく造りかえるべく神と共に世界に仕えていく、世界再創造の担い手です。これが、「神の家族」たるキリスト教会であります。ですから、使徒パウロによれば、教会は本質的に、家庭と同じです。教会の使命は、本来の家庭の使命と同じです。教会は、「神の家族」、言わば最高の家庭と言うべきものです。それは本来の家庭、否、回復した家庭、新しく造りかえられ、生まれ変わった、再創造の家庭です。それでは、「神の家族」なる教会は、具体的にどこが墮落した家庭と異なるのでしょうか。

まず第一に、「神の家族」なる教会は、キリストの血によってその罪を贖われました。

13. しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、

今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

このため、神さまに呪われ、契約から除外され、永遠のいのちもなく、神さまの祝福も平和もない呪われた最悪の状況から、救われました。そうして、神さまに受け入れられました。神さまに喜ばれました。神さまの祝福を受けました。神さまから永遠のいのちをいただいて、究極の幸いなる平和を得たのです。そして、神さまが共に住んでくださって、「御霊によって神の御住まいと」なったのです。

これは、家庭というものの本質を考える上でとても重要な事実です。神さまが共に住んでくださることは、究極の平和です。これ以上の幸いはありません。家庭のすばらしさは、お金によって決まるものではありません。その家の家長の社会的地位によって決まるものでもありません。会社の社長の家庭はすばらしく、平社員の家庭はそれに劣るというものではないし、医者家庭は立派で、農家の家庭は立派じゃないということもありません。また、家族のIQとか学歴、能力によって決まるものではありません。家族全員優秀なら幸せで、家族全員、学がないから不幸せ、ということもありません。

箴言に「一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。」(箴言 17:1)とあります。親を刺し殺すために娘が真夜中包丁を持って毎晩うろつくという家庭の話の聞いたことがあります。また、ある金持ちの家では、息子があまりに道楽好きで金遣いが荒く、自分の家の財産全部を食い潰してしまって破産してしまったばかりか、とうとう母親個人の預金にまで手を出して、母親の財産まで騙し取ったという話があります。たとえどんなに豊かでごちそうにあふれていても、財産争いや権力闘争に明け暮ればかりいて、たとえ自分の妻や息子であるうと、いつ寝首をかかれるかわからない、いつ財産を持って行かれるかわからず、夜もおちおち眠れないというのなら、そのような生活の、いったいどこに平和や幸いがあるのでしょうか。

反対に、たとえ貧しく「一切れの乾いたパン」しかなくても、その乏しい日ごとの糧を家族全員で仲良く分かち合って、感謝して食べるというのなら、順風満帆で都合の良い時だけではない、たとえどんなに大きな試練に見舞われても、揺るがぬ幸いと平和がそこにあります。試練の時こそ、真価が問われます。私たち個人も、そして家庭も、です。「一切れの乾いたパン」しかなくても、それで本当に「平和」であるなら、それは本物の平和です。これ以上の幸いはありません。結局のところ、本当の幸せというものは、お金や地位、能力によりません。家庭の尊厳や価値というものは、お金で計ることが出来ないのです。

それでは、家庭のすばらしさは、どこで計ることが出来るのでしょうか？それは、神さまです。家庭の尊さ、家庭の価値、家庭のすばらしさというものは、ただ（私たちが愛して下さる）神さまによります。私たちに家庭を与えてくださり、私たちの罪を贖ってくださった、私たちの家庭のまことの主人である、神さまによります。神さまが共にいてくださる時、その家庭は究極の祝福と平和を得たと言えます。それは、家族の人数や所有財産の如何によりません。身分の上下や貴賤の区別もありません。「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく」、ただキリストの血によって、「神の家族」はこの上なき神さまの祝福を受けたのです。たとえどんな家庭であっても、キリストの血によって贖われた家族は、間違いなく最高の尊厳と価値を得た、すなわち、それ以上にすばらしい家庭がないと言うほど、最高にすばらしい家庭なのです。

私たちは、無いものを言えば、きりがありません。それは、教会がそうです。大きな会堂がないとか、パイプオルガンがないとか、駐車場がないとか、送迎バスがないとか、お金がないとか、人が少ないとか、あるいは、牧師の資質が足りないとか、立派な役員がいないとか、信徒が忠実でないとか、教会に愛がないとか、楽しくないとか、知性がないとか、恵まれないとか、活気がないとか、.....とにかく、いちいち無いものばかり挙げていけば、きりがありません。

あれやこれやと、よく見てみたら、確かにいろいろと足りないかも知れません。欠けだらけかも知れません。あるものの方が少ないかも知れません。しかし、たとえあれもこれも無いとしても、あるものがあります。しかも、どの教会にも平等に、差別なく、等しくあるもの、それが、神さまです。イエスさまです。どんなに乏しく貧しい教会でも、しかし神さまはおられます。イエスさまは、共におられるのです。そして、イエスさまが共におられるならば、いったいそれ以上に何が必要でしょうか？お金ですか？集まる人の数ですか？充実した施設ですか？それらも、あればあるにこしたことはありませんが、しかし、最も単純に言えば、要するに「あってもなくてもよい」ものです。お金も人も施設も、それらは断じて教会の本質に関わるものではありません。金や人や物があれば教会として一人前で、金や人や物が無ければ教会として認められない、という性質のものではないのです。それらがたとえ無くても、教会は教会として成り立ち得るし、それらが無ければ、あるいは乏しければ、一言で言うと貧しければ、教会としての本質を損なう、というようなものでもないのです。簡単に言えば、どうでもよいものです。反対に、どうでもよくないもの、すなわち、これを欠いたらもう教会でなくなるというものは、何でしょうか？これを無くしたらもう教会としての看板を降ろさなければならない、教会の本質に関わるものは、何でしょうか？

それが、イエスさまです。イエスさまがおられなければ、それはもはや教会ではありません。たとえどんなに金と人と物が充実しても、イエスさまが共におられなければ、それは少しも教会ではありません。そして、イエスさまが共におられるならば、それは十分に教会です。何一つ欠けた所なく、それは真正正銘、本物のキリスト教会と言えるのです。20節には、「**あなたがたは**、使徒と預言者という土台の上に**建てられた**」と受身形で表現されます。いったい誰が建ててくださったのでしょうか？イエスさまです。教会のかしらなるイエスさまです。そのイエスさまが共におられるところが、教会です。教会とは、それ以上の意味も、それ以下の意味も、ありません。イエスさまが共におられる、そこが教会です。キリストの家族なる、教会です。キリストがそこに共に住まわれる、それが「キリストの家族」「神の家族」たる、キリスト教会なのです。家庭も同じです。キリストが共に住まわれる、そこに家庭の尊厳と価値の一切があります。無いものを言えば、やはりきりがありません。お金がないとか、財産がないとか、将来の保証がないとか、健康状態が良くないとか、家族関係が良くないとか、夫が甲斐性無いとか、妻が優しくないと、子どもが出来悪いとか、あれもない、これもないと、いちいち挙げていけば、きりがありません。確かに、いろいろと欠けがあるかも知れません。あるいは、何も無い、欠けだらけかも知れません。

しかし、あれもない、これもなくとも、イエスさまは、おられます。イエスさまは、我らと共におられます。我が家の中心におられます。そして、イエスさまが我が家に共におられるならば、それで充分なんです。イエスさまが我が家に共に住んでくださるならば、

それは立派な家庭なのです。それ以上の幸いはありません。教会と同様、金や人や物は、あってもなくても、どうでもいいものです。金や人や物は、あればあるに越したことはないけれど、無いからといって、それで家庭としての本質を損ねるものでは断じてありません。たとえ無くても、家庭として立派に成り立ちます。あれば立派な家庭で、無ければ家庭として失格、ということは、全然無いのです。

肝心なのは、イエスさまです。家の主人なるイエスさまです。家庭に、上下のランクや偏差値はありません。どっちが高貴で、どっちが卑しい、といった貴賤の区別もありません。たとえどんな家庭も、イエスさまが共におられるならば、それは立派な家庭です。この上ない、最高にすばらしい家庭です。それは、私たちの所有するものによらず、私たちを愛して罪を贖ってくださったイエスさまの故に、そうなのです。悪魔に惑わされて罪に墮落した世の家庭は、すべて「金や人や物」で人の価値を計ります。しかし、キリストの血によって罪を贖っていただいた私たちは、キリストによって人の価値を計るのです。ですから、イエスさまを信じるみなさんは、イエスさまが共におられる最高の家庭に恵まれていることを心から感謝してくださいね。話を戻します。

次に、第二番目に、「神の家族」なる教会は、（他に）どこが墮落した家庭と具体的に異なるのでしょうか？それは、神のことばです。

20．あなたがたは

使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

「神の家族」なる教会は、「使徒と預言者という土台の上に建てられており」ます。そして、「キリスト・イエスご自身がその礎石です。」（エペソ 2:20）「礎石」と訳されていますが、これは「最高の隅」というのが直訳で、「隅のかしら石」のことです。イエスさまが、「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石（隅のかしら）になった」という詩篇 118 篇 22 節のみことばを引用なさいましたが、それと同じ意味です。城壁の石垣の中で一番角に据えられる一番巨大な石がありますが、そのことです。それが四隅にどっかりと据えられて、建物の位置が決まり、上物が建てられていくのです。四隅にかしら石が据えられているのに、それを無視して別の所に家を建てる者などいるはずがありませんし、そんなことをしたら、建てても崩れてしまいます。巨大な建築物は、この四隅に据えられた「隅のかしら石」の中に建築されます。四隅に据えられた「隅のかしら石」をはみ出すことなく、それを重要な基準として、あくまでその中に収まるように、しかも、それを頼りにして、それを頑丈な支えにして、次々に建て上げられていくのです。

つまり、ここで使徒パウロが言っていることは、教会というものは、ただ恵みによって救われたはいいいけれど、その生活に於いては何の基準もなく、漫然と建てられるべきものではなく、イエスキリストを基準にして、イエスキリストをはみ出すことなく、その中に収まるように、しかもそれを頼りにして、それを頑丈な支えにして、慎重に建て上げていかなければならない、ということです。基準があるのです。しかも、明確な基準が。それが、イエスキリストです。イエスさまのみことばです。そして、イエスさまの教えを正統に継承し、時代に適用する「使徒と預言者」の解き明かし、それが教会の基準です。人類最初の家庭は、神のことばに背いて罪を犯しました。しかし、第二の家庭なる教会は神のことばの上に建てられるのです。

そのみことばはキリストご自身によって語られたもので、それを正統に解き明かす「使徒と預言者」によって適用されるものです。神のことばを正しく語り、正しく聞き、正しく実践して、神さまが造られたこの世界に神の栄光をあらわす、これが教会です。教会は、神のことばによって建てられるのです。金や人や物によって建てられるではありません。人間的な常識や世俗の原理によって建てられるのでもありません。神さまが神殿を建てるのは「権力によらず、能力によらない」と神さまは言われました。「人はパンだけで生きるのではない、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」と神さまは言われました。神のことばによって、

人は生きるのです。神のことばによって、教会は建つのです。神のことばによって、家も建つのです。

最初の人間アダムは、悪魔の言葉に惑わされました。しかし、第二のアダム、キリストは、神のことばによって生きました。それで、キリストの復活のからだなる教会も、神のことばによって悪魔の惑わしに打ち勝ち、この罪の世に神の栄光をあらわすのです。ここに、回復した家庭の姿があります。「神の家族」たる教会の姿があります。そもそも自分の家を神のことばの上に建てるのでなければ、神のことばに背いたアダム同様、自分勝手に生きる以外ありません。

教会が神のことばによって立つように、家庭も神のことばによって立つのです。私たちは、神のことばによって、結婚し、神のことばによって、夫としての務めを果たし、妻としての務めを果たし、子としての務めを果たします。神のことばによって、働きます。神のことばによって、家庭を営み、神のことばによって、食べ、神のことばによって、飲み、離婚するなら、神のことばによって離婚し、再婚するなら、神のことばによって、再婚します。だから、よくみことばを学ばなければならないし、家族で祈る、家庭礼拝をしなければならないのです。すべての基準は、神のことばです。私たち人間ではなくて、神のことばです。神のことばを基準に考え、神のことばを基準に判断し、神のことばを基準に、生きるのです。

恵みとまことに満ちた神の栄光に満ち、神の栄光をあらわす、そこに教会と家庭の本質があり、使命があります。その意味に於いて、教会も家庭も、神を宿して神の栄光を世界にあらわす「聖なる宮」と呼ばれるのです。神殿とは何か、神がそこにおられ、神が人々に語られる、それが神殿です。ちなみに、この場合、教会も家庭も、神の栄光をあらわせばあらわすほど、「成長」し、「建てられ」ていくことは言うまでもありません。

ここに集うみなさんひとりひとりが、神が共にいてくださる、そのことに感謝し、喜んでみことばを行う、キリストが最初語られ、使徒・預言者によって継承された、正統な神のことばの教理を基準に、御意志を全うして神の栄光をあらわし、良き教会を築き、それを模範に良き家庭を築いていかれるよう、主の御名により祈ります。